Eight Olympians Project Vol.28
［エイト・オリンピアンズ・プロジェクト］
TOKYO2020へ、そして その先に

Presented by
盛岡広域スポーツコミッション
盛岡市 八幡平市 滝沢市 雫石町 葛巻町 岩手町 紫波町 矢巾町
盛岡広域スポーツコミッションの情報はこちらから

北京五輪
岩手アスリート

撮影◉清水健太郎（Eikoucamera）
取材・文◉盛岡広域スポーツコミッション

鉄人・永井秀昭 かく戦えり

**38歳の“鉄人”が3度目の挑戦で悲願のメダルを獲得した。
団体としては、アルベールビル、リレハンメルで2連覇して以来、実に28年ぶりの表彰台だ。
代表引退の花道を飾った永井秀昭にその軌跡を振り返ってもらった。**

現役最後と位置付けた2021－22シーズンを38歳で迎えた。ワールドカップ出場選手中の最年長、もちろん、北京オリンピックの団体出場選手の中でもダントツの最年長である。2018年、団体4位で平昌オリンピックを終えたとき、既に34歳だった永井は、引退するか4年後の北京を目指すかの岐路に立っていた。

「北京まで代表で居続ける確信はありませんでした。『日本を再び世界のトップレベルに』という使命感がモチベーションのすべてでした。自分が必要なくなるということは、チームがレベルアップしたということです。ただ、『早く俺を追い出してくれ』と思う一方で『簡単には明け渡さないよ』という闘争心は絶やさずに、1年1年が勝負と思ってやってきました」

ときには、急成長する若手を見て自分自身をもどかしく思ったり、世界のレベルアップについていくのがやっとという現実に焦りを覚えることもあった。それでも何とか日本代表メンバーとしてオリンピックシーズンを迎えることになったが、本当の試練はここからだった。

7月の北海道合宿で自転車トレーニング中に転倒し左肘を骨折。ストックを思い切り突けるようになったのは1か月半後のことだった。さらに、10月のヨーロッパ遠征中にぎっくり腰を発症。何もできずに悶々とする日々も経験した。

「ここからトレーニングの強度を上げてシーズンに入っていく、という重要な時期でしたから心が折れかけましたね。年齢も年齢ですし」

そんな永井を勇気づけてくれたのが家族や仲間たちだった。「ヒデならきっとできるはず。思い残すことなくやってみれば」と励まされ、前向きな気持ちを取り戻した。

そして迎えた北京オリンピック。日本は個人戦でなかなか思うような結果を出すことができないまま、最大の目標としていた団体戦を迎える。

キング・オブ・スキーと呼ばれるノルディック複合競技は、ヨーロッパではとても人気が高い。世界ランキング4位の日本は、ノルウェー、ドイツ、オーストリアの欧州勢3強の壁を崩さなければメダルはない。そんな中で日本は、前半のジャンプでトップと12秒差の4位につけて、後半のクロスカントリーに望みをつないだ。

「日本としては得意のジャンプで3強を引き離し、クロスカントリーで逃げ切る作戦でしたので、僅差とはいえ4位から表彰台を狙うのは少し厳しい状況でした」

しかしチーム・ジャパンはここから本領を発揮する。日本が選んだワックスが北京の硬い人工雪にぴたりとマッチし、一走渡部（善）、二走永井が期待以上の快走を見せて大黒柱・渡部（暁）につなぐ。エースが揃うこの区間で優勝候補ノルウェーが一気に抜け出すが、渡部（暁）は動揺することなくドイツ、オーストリアと競り合う形でアンカー山本につないだ。

「三走の（渡部）暁斗まで先頭集団に食ら

ノルディック複合
永井秀昭

profile
永井秀昭（ながい・ひであき）
1983年9月5日生まれ。八幡平市出身。身長170㎝、62㎏。盛岡南高校から早稲田大学に進学し、現在は岐阜日野自動車に所属。2012年（28歳）にワールドカップ初出場。

■主な成績
2014年ソチ五輪（30歳）
個人NH22位　個人LH26位　団体5位
2018年平昌五輪（34歳）
個人NH14位　個人LH12位　団体4位
2022年北京五輪（38歳）
個人LH31位　団体銅メダル

ノルディック複合ジャンプの公式練習を終えた永井秀昭選手（河北省・張家口）

いつき、最後は若手成長株の（山本）涼太にすべてを託す作戦でした」

残り500メートルで山本がオーストリアを振り切ったのを見たとき、ゴールで待つ永井たちはメダルを確信した。

「選手一人ひとりのパフォーマンス、コーチの采配、ワックス、スキーの選択、これらすべてがかみ合った最高のレースでした。まさにチーム・ジャパンで勝ち取ったメダルでしたね。競技人生の最後にまさかこんなご褒美が待っているとは思ってもみませんでした」

諦めなければ、夢はいつか現実になる。そのことを大舞台で示した永井だったが、本人の思いは少し違ったものだった。

「うーん。『諦めなければいつか必ず夢が叶う』というよりも、『努力してもダメだったら素直に受け入れる』というのが僕の生き方です。諦めればチャンスはゼロということ。だから、もしも今回メダルに届かなかったとしても、その選択にまったく後悔はなかったと思います」

同郷で大学の後輩でもある谷地宙をはじめ若手有望選手が育ち、安心して複合・日本の未来を託す環境が出来上がった。引退後の進路はこれからだが、選りすぐりの選手たちを世界に送り出す仕事と同じくらいに、原石を見つけ出して磨き上げていくことにも魅力を感じると言う。

「未来は誰にもわからない。未来は自分で確かめに行くもの。だから失敗を恐れずにチャレンジしてほしい」

最後に語ったその言葉は、未来のオリンピアンを目指す子どもたちに送る熱いメッセージである。